

琉球大学学術リポジトリ

写真や図を中心にみる琉球の農作物主要病害虫 (2)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田盛, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19912

即ち藥百貫(三七五キログラム)を使用すれば四、四貫(二五、四庶)の石灰窒素を添加する必要があるが、藥だけ単用するより諸種の材料を混用する方がよい。又材料の反応はアルカリ性にすれば発酵が促進し高熱を發する。

適当な加水量は材料の質、又は踏込みの程度とも関連するが、その全体の六、五—七〇%、即ち乾重物の一、五—二、五倍の水量とするのがよい。水分が少なく、踏込みが軟かいと発熱は速く、高いが持続せず、反対の場合には発熱は低いが持続する床外で材料に水をかけ、床内に入れて所要量の石灰窒素と混ぜながら踏込むのがよい。踏込みの厚さは三十程程度が適當である。

二、床土

床土の良否は苗の生育に重要な関係がある。肥料成分を十分に含み、土壌反応適度で、病害が發生しないように古い床土は用いない事は勿論、通気の良い事が大切である。培養土を六カ月前から準備してある時は、その後二回、水分を与えながら切り返し、粗目にふるつて用いる。床土の厚さは播種床二寸、一回移植床二寸、二回移植床三、五寸にする。床土と障子の距離は低い程温度は上るが、同時に徒長し易くなるので、南側に於いて播種床で一、一回移植床二寸、二回移植床三寸位とする。

三、温床管理

三月下旬に大苗を定植するように育苗すると、トマト、南瓜、胡瓜、茄の順に植出すものとしてその育苗期間は概ね七〇、六〇、七〇、八五日であるから、これにより播種期を予定する。この場合播種床と一回移植床は一、二月の低温期に当るの十分に踏込み二〇—二五度Cの床温を保たしめ、二回、三回移植床は床底にわらを敷いて床温を絶縁する程度に止め、寒冷の日にはビニールで覆うて保温するようにする。

催芽は^①では一昼夜侵種して袋に入れ、油紙に包んで人肌につけたり、過熱を避け、浅く堆肥に埋める方法が広く行なわれている。

播種は条播とし、瓜類は一粒播、^②類は粗く条播し、細い床土と砂を混じて覆土し、早目に間引いて徒長を防ぐ。発芽揃い後は灌水をひかえ目にして徒長を防ぐ。無催芽種子を播く場合は踏込みと同時に土入れして播き付けると、発熱までに十分吸水してよい結果が得られる。

一回移植は瓜類は双葉が展開し本葉があらわれ始める頃が適期である。茄、トマトは二回間引いて、本葉三枚の頃移植する。土をつけず、根をいためぬよう掘取り指で孔をあけながらうえる。根元にやや深目に土を盛り上げ植条の間に深い溝をつくりそこに灌水する。苗の取扱いは葉先をつまんで作業する。移植時には陽に当らぬよう順次に障子に粗目の陽よけむしろをおうて日射をさける。一、二日間はむしろをおうて萎れるのを防ぎ、漸次日光にならす。

二回移植は瓜類で本葉一、二枚、茄、トマトでは五、六枚が適當となる。(友奇長重)

写真や図を中心に見る



(2)

病害

ハクサイのべト病(露菌病)

宿主 ハクサイ、ダイコン、カブ、カンラン、カラシナ、ダイサイなど。

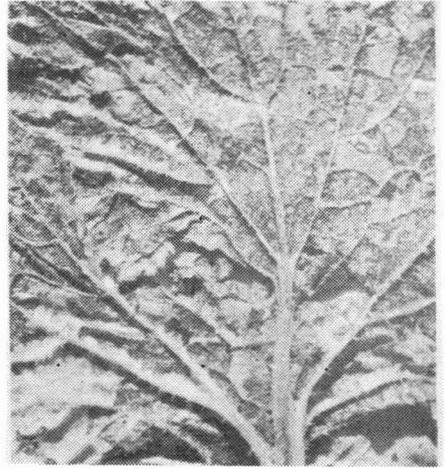
(七頁よりつづき)

コンクリート一立方メートルに対して大体一四五斤乃至二二〇斤である。ここで特に注意しなければならぬ点は、コンクリート中に於けるセメントの一部を骨材で置き換えても、又、骨材の一部をセメントで置き換えても、使用水量を一定に保てばコンクリートの流動性は殆んど一定であるという事である。

セメント使用量が変わつても、ある流動性のコンクリートを得るために使われる水量がほぼ一定であることから考えて、ある一定の流動性を持つ貧配合のコンクリートにおけるセメントペースト(セメントと水で出来たセメントの糊状のもの)は同じ流動性をもつ富配合のコンクリートにおけるセメントペーストよりもその糊状の状態がうすいことは明白な事である。つまりコンクリートの流動性を一定に保つ時に、セメントの使用量を減ずれば、セメント一袋に対して使用する水の量を増さなければならないのである。(仲田元一)

発生 二月から四月にかけてみられる。
病徴 主として葉に、又茎や花部にも発生し、葉においては、やや紫色をおびた周縁あきらかでないかつ色病斑を生じ、茎や花部では被害部膨れて不正形となる。

病斑の上には白色のカビを生ずる。



ハクサイのべト病菌(上)と大根の被害葉

病菌 分生子梗は気孔より一―二本出る。その上部は四―八回分岐する。長さ二〇〇―六〇〇ミクロン、巾九―二〇ミクロン。分生子は、広だ円形卵形、あるいは球形、無色、長さ一五―二九、巾一四―二四ミクロン。

防除

- 一、間引きして透光、通風をよくする。
- 一、病株は直ちに除去焼却する。
- 一、発病をみたら、ダイセン四〇〇倍液、又は二石式ボルドー液を散布する。
- 一、輪作すること

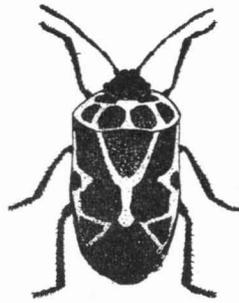
害虫

ヒメナガメ

形態 体長八―九ミリ全体藍色を帯びた黒色にだいたい色の斑紋がある。体の下面は淡色又は黄白色、各胸節と腹節の中央及び両側に一個ずつのだ円形の黒斑がある。

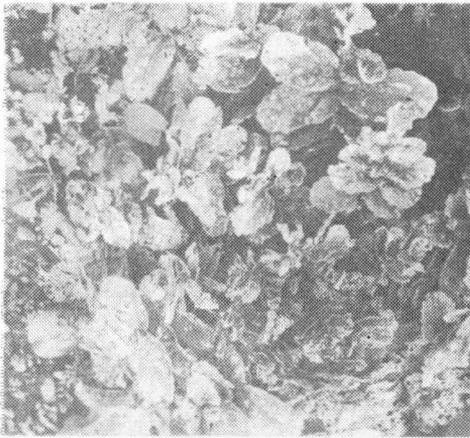
触角は五節で黒色。

前胸背はだいたいの地に、六個の黒紋をあらわす。



ヒメナガメの成虫

ヒメナガメとその被害状況(左)



小楯板は黒色でY字型の大きなだいたいの色紋がある。半し額は黒色、革質部の前縁はだいたいの色で、二つの山形があつて、その中に各一つずつ黒紋がある。

加害 幼虫、成虫共に吸取口をもつて、ダイコンハクサイなどアブラナ科作物に寄生して加害する。琉球では年中みられる。

防除

- 一、BHCの一%粉剤を散布する。(但し白菜類はBHCにより葉害をうけるから濃いものを用いないように注意すること)リンデンもよいと思われる。
- 一、硫酸ニコチンの八〇〇倍液を散布する。
- 一、早朝、煙草粉木灰の散布も効果あり。

(田 盛 正 雄)

発行所 琉球大学農家政工学部

発行人 島 袋 俊 一

印刷 沖繩タイムス社

指令第一九八〇号

一九五八年二月二五日印刷

一九五九年一月一日発行